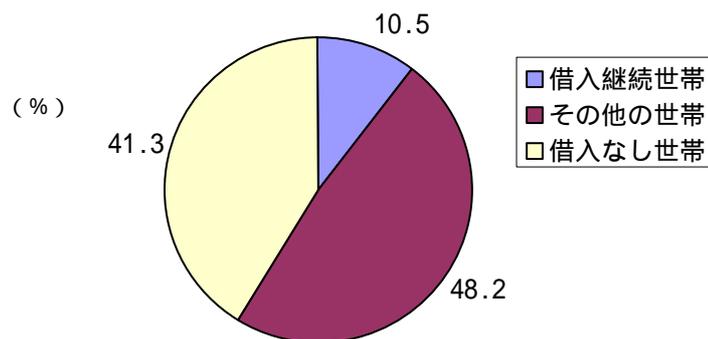


2 . 借入がある世帯とない世帯の間に大きなゆとりの差

2 - 1 借入残高が残り続ける家計は約 1 割

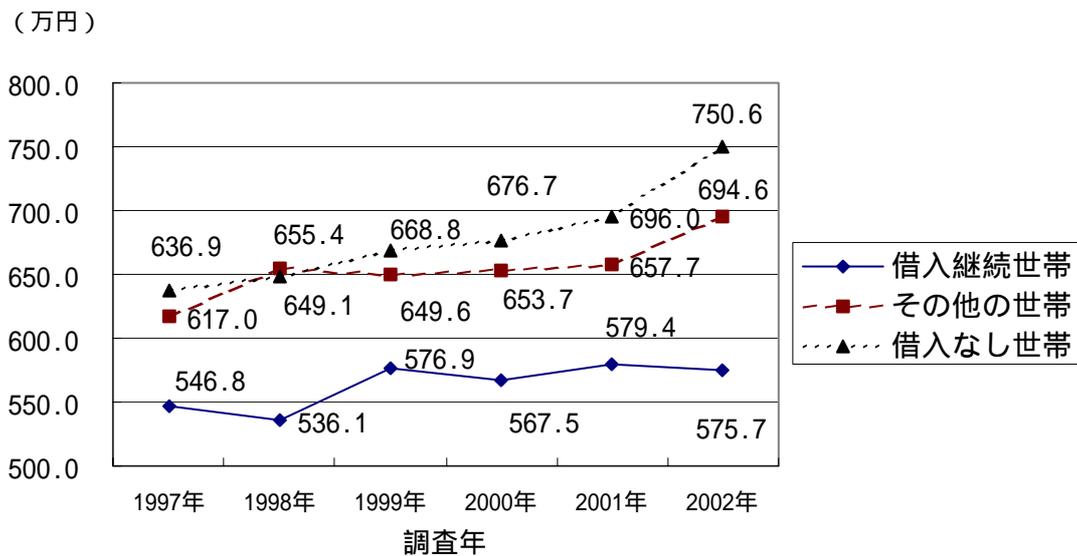
有配偶者の家計における借入行動のうち、住宅ローンを除く借入行動に着目したところ、各世帯を三つのタイプに分けることができた。第一のタイプは、1997年調査から2002年調査にかけて常に（住宅ローンを除く）借入残高が千円以上ある世帯（以下「**借入継続世帯**」）で、全体の10.5%にのぼる。一方、第二のタイプとして、同じ期間中に（住宅ローン以外の）借入が全くなかった世帯（以下「**借入なし世帯**」）があり、全体の41.3%を占める。残りの48.2%が、第三のタイプ（以下「**その他の世帯**」）である（図表4）。

図表4 借入タイプの分布



各世帯の夫妻年収に注目すると、このうち「借入なし世帯」と「その他の世帯」は、時間の経過に伴い着実に夫妻年収が増加していることがわかる（図表5）。前者では、1997年調査時の夫妻年収（1996年年収）は636.9万円で、2002年調査時（2001年年収）は113.7万円増加し750.6万円にまで達している。また後者では、1997年調査時の617.0万円から、2002年調査時には77.6万円増加して694.6万円となっている。しかし、第一のタイプ（「借入継続世帯」）については、1997年調査時に546.8万円で、2002年調査時でも575.7万円にとどまっている。「借入継続世帯」は、「その他の世帯」や「借入なし世帯」に比べて、一貫して夫妻年収が低く、収入の増加もあまりみられないという特徴があることがわかる。

図表5 借入タイプ別夫婦年収平均の推移



2. 借入がある世帯とない世帯の間に大きなゆとりの差

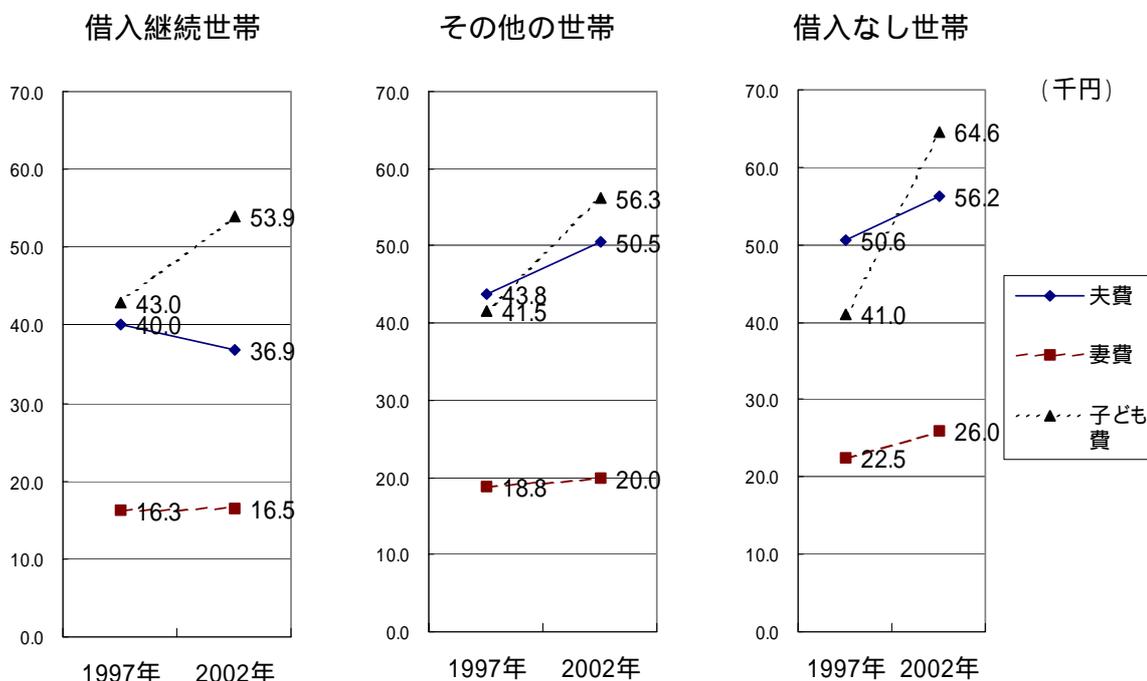
2 - 2 妻と夫のためのお金を抑え、子どものためにまわす

調査対象世帯は子育てにお金がかかる時期にあり、1997年から2002年にかけて、各世帯の1ヶ月の「子ども費」(子どものための支出・貯蓄)は1~2万円増加している(図表6)。これは主に、子ども数の増加や子どもの成長に伴う支出・貯蓄の増加による。「借入なし世帯」の子ども費は5年間に約2万円増加し6万4600円、「借入継続世帯」と「その他の世帯」の子ども費はそれぞれ9000円と1万5000円ずつ増加し、5万3900円と5万6300円である。

「借入継続世帯」は、前項でもみたように夫妻収入の上昇率が低いため、子ども費が増加すると、それをどう賄うかが問題になる。図表6をみると、このタイプの世帯では、他のタイプにはみられない「夫費」(夫のための支出・貯蓄)の減少がみられ、1997年には4万円だったのが、2002年には約3000円低下して3万6900円となっている。つまり、家計のなかで、夫費を削って増加する子ども費にまわしていることがわかる。

また、「妻費」(妻のための支出・貯蓄)をみると、時期によらず、どのタイプの世帯でも夫費の半分以下と非常に低くなっており、特に少ない「借入継続世帯」の場合では、2002年で1万6500円にとどまっている。

図表6 借入タイプ別 子ども費・夫費・妻費の変化



2 . 借入がある世帯とない世帯の間に大きなゆとりの差

2 - 3 借入継続世帯で生活費目的の借入が増加

次に、世帯の借入タイプ別に借入目的をみると、「借入継続世帯」では、1997年には生活費補填のための借入は11.9%であったのに対し、2002年では25.0%と2倍以上に上昇している（図表7）。さらに教育費のための借入も2.4%から9.5%に、借金返済のための借入も6.0%から7.1%に上昇している一方、耐久消費財、衣類、趣味などのための借入は、いずれもおおむね低下傾向にある。

図表7 借入タイプ別 借入れ目的の変化

複数回答(%)

	借入継続世帯			その他の世帯		
	1997年	1999年	2002年	1997年	1999年	2002年
自動車	60.7	65.5	60.7	33.5	31.4	24.7
生活費	11.9	21.4	25.0	4.2	2.3	3.1
耐久消費財	16.7	10.7	10.7	6.8	6.5	3.6
教育	2.4	8.3	9.5	1.3	3.1	2.3
趣味など	14.3	11.9	8.3	3.6	3.4	1.8
借金返済	6.0	6.0	7.1	2.1	1.3	2.1
衣類	9.5	9.5	7.1	3.6	4.7	2.9
結婚	0.0	0.0	0.0	0.8	0.2	0.0
病気	1.2	1.2	1.2	0.3	0.8	0.8
その他	9.5	11.9	9.5	3.1	2.6	1.6

2. 借入がある世帯とない世帯の間に大きなゆとりの差

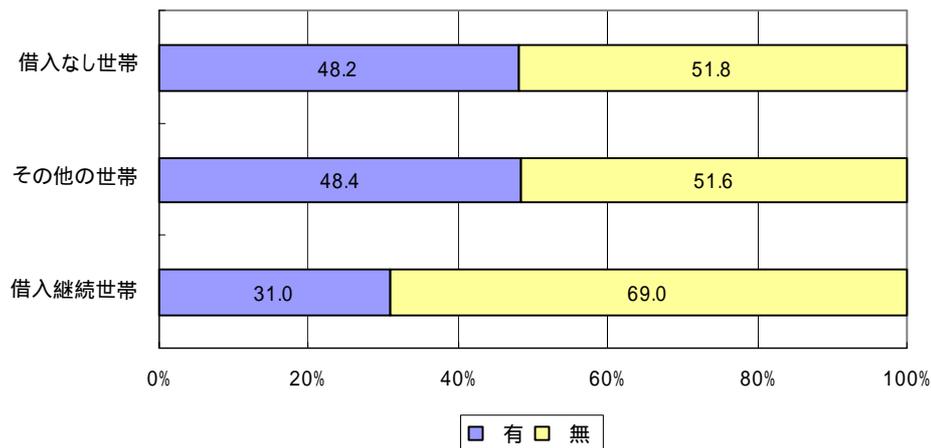
2 - 4 借入継続世帯にとって厳しい資産形成への道

住宅ローン以外の借入タイプ別に家計の状態をみてきたが、ここでは住宅ローン保有率や預貯金現在高についてみてみよう。

「借入なし世帯」と「その他の世帯」の住宅ローン保有率は、それぞれ48.2%、48.4%であるのに対して、「借入継続世帯」では31.0%にとどまる(図表8)。同じ借入でも日々の生活のための借入は住宅ローンとは異なり、資産形成につながるわけではないため、「借入継続世帯」が高齢になったときに、家計の状態が悪化することが懸念される。

さらに預貯金現在高をみてみると、「借入なし世帯」の預貯金額は約788万円であるのに対し、「借入継続世帯」は124万円(図表9)と、ここでも差が見られる。

図表8 借入タイプ別 住宅ローン保有率



図表9 借入タイプ別 貯蓄現在高

